
色彩

海王星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

色彩

【Nコード】

N2258Y

【作者名】

海王星

【あらすじ】

22世紀の日本で発見された『色箱』しきそう…それは全部で465種類あり、それぞれが違う色、違う能力を持つ。これはそんな『色箱』を扱う少年の物語…

1色

「いてっ！」

これで人にぶつかつた回数は38回目：100m先の店からここま
で来る間にだ。…自己紹介が遅れたな、俺の名前は色神銀^{しきがみぎん}。周りか
らは銀と呼ばれている。

「…おかしいな、この辺りのはずなんだけど…さっき手に入れたば
つかりなにのな…」

俺は先ほどの辺りで落とした赤の眷属^{けんぞく}『浅蘇芳^{アサスオウ}』を探している。

「おっ、あつたあつた…」

慌てて俺は色箱^{しきゆう}に手を伸ばす。だが俺の手は『浅蘇芳^{アサスオウ}』を掴めなか
つた。

「お？何だこの箱

突如現れた男が『浅蘇芳^{アサスオウ}』を拾い上げる。

「…すいません、それ俺のなんで返してもらえます？」

俺は丁寧^{しんねい}にそう言つて、色箱^{しきゆう}の返却を求めた。

「…あ？何だガキ？」

男はそう言つて俺を睨む。おいおい…そんだけで怒んなよ。

「はあ…誰がガキだと…？」

男の後ろに回りこみ、首に小刀を突きつける。一瞬の出来事に、男
は反応できない。男は力なくその場に膝を付いた。俺はその男の手
から『浅蘇芳^{アサスオウ}』を取り上げて、携帯を開いた。アイツの事だ、どう
せ今頃賞金首を狩っているだろう。

「…やつぱりねえ…」

携帯の画面には…

『6丁目の廃工場第2倉庫で待つてろ。10時には来る』

…主語が無くてもわかる。

「…しょうがないか」

後で文句言つてやる。俺はため息をついて、その場を後にした。

「色神銀か…面白そうだね」
建物の影から紅い双眼が覗き、俺の姿を捉えていた。

「…相変わらず臭い…」

赤髪の青年は、真つ赤な液体の滴る袋を担ぎ、近くにあつた廃墟に入っていく。彼の手は袋を掴んでいた所為か、真つ赤に染まっていた。

「…いるんだろジーク」

赤髪の青年は暗闇に向かつて話しかけた。それと同時に、闇の中から足音が聞こえる。

「また狩って来たのかい？相変わらず君はすごい…」

闇の中から出て来たのは、色白で黒髪の青年だった。恐らく赤髪の青年と同じくらいの年齢だろう。

「こんな汚い仕事を平気でやれるなんて」

「いいから早く換金してくれ。臭いから」

赤髪の青年は目を細めながら鼻をつまむ。

「分かったよ洗雅」

ジークは面倒くさそうに袋を摘む。

「また首だけかい？いい加減切り落とすのやめてくれよ。本当君はどうかしてる」

ジークは頭をかいた。

「体も一緒だと重たいだろ？」

洗雅と呼ばれた赤髪の青年は、そんな事を言いながら携帯でゲームをする。

「…」

ジークはそんな彼を横目で見てため息をつく、首を持って暗闇に消えた。

「ため息つくとき幸せ逃げるらしいが…」

「誰のせいだ！」

暗闇の奥からジークの怒鳴り声が聞こえる。

「あまり腹を立てると、血圧上がるぞ」

洗雅の口からそんな言葉が飛ぶが、ジークの顔色は全く変わらない。暗闇の向こうからは、物音一つしない。

「早くしてくれ…俺も仕事がある」

すると、闇から何か飛んでくる。

「早くしてやったよ？」

洗雅に向かって飛んで来たのは、中に現金の詰まったアタツシユケースだった。洗雅はそれを掴むと、後ろを向いて歩き出す。

「また首を獲ったら来る、次は投げるなよ？」

くるりと首だけを回してジークを見据える。

「どうせ来るんなら君じゃなくて銀が来てくれると嬉しいんだk」

ジークの言葉は、向かって来た大剣によって遮られた。大剣を振ったのは、洗雅…

「…ケンカなら買うが？」

それだけ言っつて、大剣を鞘に収める。

「おうおう、せんとうみんぞく戦闘民族つてのは怖いねえ」

わざとらしく言うジーク。洗雅の肩が僅かに動く。だがその直後、何もなかったように闇に消えて行った。

「…はあ」

待ち合わせ場所に着いた途端、ため息を吐く。裏世界の俺は『何でも屋』を相棒と共に営んでいる。情報提供や殺しの依頼から、子守やおつかいなどの依頼まで…今日もそんな依頼を請けに来た所だ。

「…もしもし、こちら『何でも屋』です」

俺は依頼主の番号に電話をかける。

「はい、こちら鈴木です」

依頼主の男が電話に出る。声からして20代半ばだろう。

「探して欲しいと言われていた物についてですが…詳細をお教え下

「さい」

「うお、自分でも驚くほどの敬語だ。」

「ああその話か」

それ以外に何があるってんだよ。口から漏れそうになる言葉を必死に飲み込む。

「大昔、中国の地に降り立った朱雀すずくの羽です」

「…朱雀…？」

朱雀すずくなんているのか？俺は半信半疑で、今の説明をメモにとる。

「その羽を持つだけで、不老長寿ふろうちゆうが手に入るといふ伝説があります」
わお、任務じゃなかったら絶対的に欲しいね、ソレ。

「了解しました、すぐに探してきます」

俺はそれだけ言って、携帯の通話を切る。はつきり言っと物捜しの仕事は面倒だ。

「…俺『黄の眷属色』けんぞくしき 持っていないしな…」

ふと腕のデジタル時計に目を落とす。表示は9：58…後2分か。

「どこかで死んでたらいいな いいな いいのにな」

爽快なリズムに乗せて、そんな事を呟く。

「なるべく陰湿な所で 驚くほどの奇病で」

あ、何か楽しくなってきた。

「そのゴミのような遺伝子を 未来に残さないで」

「誰がゴミだ」

不意に後ろから声がする。腕時計を確かめると、10：00ジャストだった。

「何でもないよ洗雅」

「…『櫛色』ハシイロ…抜と」

「ごめんなさい」

「フン…」

畜生、この俺に頭を下げさせるとはいい度胸だ。

「で、依頼内容は」

何もなかったような顔で、洗雅が俺に尋ねる。少し腹が立つ。

「中国の『朱雀の羽』って代物を持ち帰ってくるだけだとさ」

俺の言葉に反応したのか、洗雅の眉が少し引き攣る。…そう言えば洗雅は戦鬪民族『朱雀族』の末裔だったな。てか早く滅んでくれ、そんな民族。

「で、飛行機にする？徒歩にする？俺に頼る？」

その途端、横から恐ろしいほどの殺気が。スリル満点だよコレ。

「お前に頼る事だけは避けておく」

さり気に失礼な事言いやがったよコイツ。

「どうすんの？洗雅『白の眷属色』持ってないじゃん」

あ、何か落ち込んだじゃったよ。可愛いなオイ。

「銀、お前はどうかやって行くんだ？」

腐れ朱雀が、俺をチラ見しながら聞いてくる。普通にこっち向けよ。

「俺は…『卯の花』で行くね」

「よし、寄越せ」

…そう言われてハイって言う奴いないと思うよ？

「何で？」

「中国に行くから」

いや、これないと俺も行けないんですけど。

「仕事先は中国なんだろ？」

そんな事は分かりきってんだよ。俺は腰から青みがかった『色箱』を出し、開箱した。卯の花色の髪の少年が現れる。

「俺はよこせと言ったはずだが？」

知るか。卯の花が空気に手を翳すと、2体の大鷲が現れた。俺はその大鷲の背に飛び乗る。

「これで中国までひとつ飛びだぜ？」

すると、洗雅も渋々大鷲の背に飛び乗った。

「結局俺を頼るかたちになったな」

その途端、俺の屈めた上を銃弾が掠める。横を見ると、銃口から煙を出している二丁拳銃を持った洗雅がいた。確信犯だねコイツ。

「うわーんパー、洗雅たんが虐めてくるうー」

また銃弾が飛んでくる。俺は屈んでかわす。

「…死にたいのか？」

洗雅がそう言うと、二丁拳銃が泡のように弾けて消えた。

「すみませんでした」

畜生、また俺に頭を下げさせやがって。

「あの赤髪…間違いない、『朱雀族』の末裔か…」

凍て付くような蒼い瞳が、空を舞う俺と洗雅の姿を捉えていた。

「…徹底的に潰す」

無表情な青年の右目を跨ぐ、青い炎の刺青が不気味に燃え上がる。

彼の双眸には憤怒の炎が灯っていた。

「…銀」

「何？」

「…いや、何でもない」

洗雅が一瞬不審そうな表情をするが、すぐに元の無表情な顔に戻る。

「…追手か？」

「…違う」

洗雅の翠の瞳が、俺の背後を見つめていた。俺もつられて後ろを振り返る。

「…何もないじゃん、やっぱ洗雅の頭は空っぽなんだね」

「頭の中に何もない真空が広がっている銀に言われたくない」

「洗雅こそ、その空っぽの頭に鳥でも飼ったら？」

あーあ、またいつものように口喧嘩が始まる。

「銀こそ、その宇宙空間の頭内に星を生み出して有効活用すればいいだろう？」

「んー、洗雅と言う名前の粗大ゴミは何曜日捨てるのかな？」

俺がそう言うと、また頭の上を銃弾が掠める。洗雅の手にはマシン

ガンが。

「チツ……」

うわぁ…相棒にマシンガンぶっ放した上に、舌打ちまでしたよこの人。洗雅の手に握られていたマシンガンが弾けて消える。

「次は殺すだけでは済まない」

洗雅はポケットから携帯を出し、ゲームをし始める。俺もポケットから携帯を取り出す。いつものように、インターネットでよく行くサイトにアクセスする。

「おお！みんな揃ってるじゃん！」

俺がふとそう言うと、洗雅がこちらを見た。

「…みんな？俺とお前以外誰がいる」

洗雅は俺の一言を真に受けているらしい。違えよ、俺が言ってるのは『裏世界（ネット上）』の事だよ。

「何でちゆか？洗雅たんには話してないでちゆよ？」「…」

おぞましいほどの殺気を放つ洗雅。本当に気が短いなあ洗雅たんはまだ中国に着くには5時間以上かかる。最近の携帯は電池持続時間が長くなって、満タンなら1週間は持つ。科学って凄いね。

「さて、チャットに入ろうつと」

ここには洗雅も来ない。俺の憩いの場だ。

チャットルーム

Agさんが入室しました

Ag()【こんちわー】

ネイビー()【久しぶりだね〜】

日洋()【いやいや、昨日もチャットで話したよね？】

Ag()【まあいいではないか。いつものように笑いあり、泣きあり

だよ日洋殿】

日洋（「時代劇!？」）

奏さんが入室しました

ネイビー（「あっ！奏さんだ！ヤッホー！」）

奏（「こんにちは」）

Ag（「相変わらずテンション高いねネイビーさん・元気でなにより」）

日洋（「…ただの馬鹿だと思うけど？」）

ネイビー（「ちよっ！酷っ！僕これでも博士号持ってるよ!？」）

奏（「凄いですね。私色使士^{いろつかい}なんで、勉強する暇ないんですよ。」）

ネイビー（「…僕も一応色使士^{いろつかい}です。」）

日洋（「うっそ!?マジで?!」）

Ag（「リアルじゃ超真面目だったりしてww」）

奏（「…もしかして、皆さんも色使士^{いろつかい}ですか？」）

日洋（「ご名答」）

Ag（「うん、まあね」）

ネイビー（「見たか日洋！僕は馬鹿じゃない！むしろ天才だ!」）

Ag（「それを自分で言うのもどうかと思うけど…」）

奏（「あっ、私これから仕事なんで、これで失礼します。」）

日洋（「ヤバッ！もうこんな時間だ!」）

奏さんが退室しました

日洋さんが退室しました

Ag（「仕事頑張って下さいねー」）

ネイビー（「そう言えばAgさんは仕事ないんですか？」）

Ag（「今仕事で中国に向かってまーす」）

ネイビー（「へえー、何の仕事で？」）

Ag（「『朱雀^{すばく}の羽』ってのを探しに行くんです」）

ネイビー） 【…朱雀すざくの羽、かあ…じゃあ1つ言っておくよ】
ネイビー） 【もし見つけたら、絶対に素手で触っちゃダメ】
ネイビー） 【皮膚を焼かれるから、熱に強い手袋をした方がいいよ】

2色

暗い路地の中に2人はいた。1人は紺色の髪で、右頬に青い燐光の刺青をした長身の青年。もう1人は金髪で、手に大量の札を貼り付けた少年だ。青年が口を開く。

「さて、追跡は地中、地上、空中のどれがいい？」

手には水色の色箱しんくわが握られていた。

「選べと言われたら空だね」

札を貼られた両腕からは、常に紅いオーラのような物が滲み出ている。

「そもそも君の実力からすれば、ここから遠距離で攻撃できるでしょ？」

金髪の少年の言葉に、青年は目を細める。

「普通に殺してしまつては意味がない。苦痛を与えて絶望を与え、精神を崩壊させて殺す」

青年は無表情でそう言う。だがその双眸には、恨みと殺意の炎が宿っていた。

「あー、でも目玉だけは頂戴ごとうだいよ？宝珠ほうじゆ作りに使うから金髪の少年の周囲に、無数の宝珠ほうじゆが浮遊する。

「…ノツカ、まだ宝珠ほうじゆ作りをやめていなかつたのか？」
ノツカと呼ばれた金髪の少年は、クスツと笑う。

「1万個作るのが僕の目標だからね。それには5000人分の目玉が要る」

青年は思った。自分が寝ている間に目が抜き取られるのではないだろうかと。

「…聞きたくはないが、現時点で宝珠ほうじゆはいくつ作つたんだ？」

「んー、ざつと400。正確には396個」

青年の問いに、清々しい顔で答えるノツカ。

「あと9604個 あと4802人」

「…珠使士たまつかいの考える事は相変わらず理解できない」

そう呟く青年の周りを、ノツカは無邪気に跳ね回っている。

「蒼もそんな事言ってるけどさあ、内臓コレクションしてんじゃん」
ノツカがピタリと走るのをやめる。蒼と呼ばれた青年は苦い表情を浮かべる。

「あ、でも動かなくなったり、病気になったりしてるのは集めないんだよね」

ノツカの感情を表すかのように、396個の宝珠ほしゅが周囲を旋回する。まるで惑星の周りを回る衛星…いや、恒星の周りを回る惑星のように…

「中国到達！我很高興！」

俺は大鷲の背から飛び降り、中国の大地を踏みしめる。現在の時刻はPM3:30。出発してから5時間30分経っていた。

「中国語で挨拶など必要ない。日本語は世界の共通語だろうが。早く依頼の品を探しに行くぞ」

俺の相棒（仮）は、大鷲の背で優雅に寛くつろいでいた。そう言うお前は寛くつろいでるのかよ。

「ああそうだな、洗雅もちゃんと呼いて来なよ？」

俺が指を鳴らすと、乗ってきた2頭の大鷲が泡のように弾けて消える。凭もたれかかっていた洗雅はバランスを崩し、大地に叩き付けられる。

「…だつてさあ、探しに行こうって言出したの洗雅じゃん？」

反射的に左に避けた俺のすぐ右側を、銃弾が掠めて飛んでいく。相棒（仮）の洗雅の手元を見ると、鈍く光る二丁拳銃が握られていた。

「死ね、いや殺す」

「言い換えたつものようだけど、要点は大して変わってないよね？結局俺死ぬじゃん」

「だから死ね」

再び飛んで来た銃弾を、頭を後ろに反らして避ける。俺を捕らえられず後ろのコンクリ壁に着弾した弾は、凄まじい勢いで壁を溶解していく。

「このっ！ 焰弾えんだん使いやがっつて！ 殺す気か！」

「何故避ける」

「避けるのが普通だろ！ 聞いてんのかオイッ！」

洗雅は耳を塞ふさぎ、俺の話などまるで聞いていない。両手に握られていた二丁拳銃はいつの間にか消えていた。

「やはり俺が銀などのために手を汚す必要はない。勝手にのたれ死ぬのを待とう」

お願いしまーす、誰か今すぐコイツを処刑して下さい。なるべく悲惨ひさんな殺し方でー。

「洗雅：俺はお前が嫌いだ」

「安心しろ、俺も銀が嫌いだ」

洗雅の肩に、全身ほのおが焰ほのおの鳥がとまる。

「お前を燃やすと、灰の代わりに酸化銀さんかぎんが残りそうだな」

俺は銀で出来てんのか？ だったらある意味すげえよ。

「ここで暇を潰しても仕方ない。近隣住民きんりんにでも話を聞きに行く、付いて来い」

洗雅はそう言うと言おのの鳥を消し、人気のある方へ歩き出す。コイツの言う事を聞くのはあまりいい気分ではなかったが、一応付いて行つてやるっ。

「言い方が間違つてたよ洗雅。どうぞ付いて来て下さいませ、だろ？」

洗雅の顔に苦い表情が生まれた。

「うああああ！ また負けたあ！」

「…行動パターンが直線的すぎる」

2人は旅客機りょかくきの中でゲームをしていた。最近最近は技術が発達し、病院

や旅客機りょかくきなどでも赤外線通信が使える。

「だって僕初心者だもん…手加減してよう…」

ノツカは頬を膨らませる。

「命と命の取り合いの中で、手加減などという言葉は存在しない。よって手加減はしない」

ノツカがウル目を使うが、蒼はあっさりと言い捨てた。

「色神銀は甘くない、かつて白虎族びやくしゅうの『栢かや』をも倒したほどの実力者だ」

蒼の青い目が細くなる。彼も銀達に興味があるのだ。

「白使しろつかいの栢かや…やられてたんだね」

ノツカの周囲の白い宝珠ほうじゆが跳ね回る。

「『純色じゆんしよく』を持つ相手を倒してるなんて…更に興味が出て来た…」
ノツカは喜悦きえつの笑みを浮かべる。周囲を回っていた宝珠ほうじゆが消えたのと同時に、両手から溢れる紅い光が増した。

「…南雲洗雅なぐもしやうがには手を出すな。アイツは一族の敵かたき…誰にも渡さない」
蒼の目に憎悪と殺意の炎が灯る。

中国のよく分からん村…そこに俺と洗雅はいた。

「あ…づい…！何でわざわざ砂漠通るの!？」

「暑いかな？俺にはこれが丁度いい」

あの一、今何度だと思ってるんですか？携帯にはどう見ても43度
つて表示されていますが…？

「…『紅碧こうへき』装備」

水色がかった色箱を取り出し、開箱かいそうする。現れた紅碧へにみどりの髪の少年は、俺を包むように気化した。『水の眷属色けんぞくしよく』の特性『低温』を活かし、自分の周囲の温度を下げる。

ああ、さつきよりは涼しくて快適だ。

ふと横を見ると、洗雅は全く汗を掻かいていない。朱雀族すゑかくは高温に強い皮膚を持っていると言われるが、本当だったようだ。

「…何をジロジロ見ている。俺ではなく前を見る」

「や、相変わらず馬鹿面してんなーと思っただけ」

洗雅から凄まじい怒気おこが放たれる。無視だ無視。

「…そう言うお前はアホ面だな」

「知ってる？アホって漢字で書くと『阿呆』あほうになるんだよ？漢字で書けないなんて、やっぱり馬鹿だね」

破碎音はさいおん。俺がが屈んで避けた頭上を銃弾が掠め、後ろにあった岩を破壊する。

「何でも武力で解決しようとするんだ、わーいバーカ」

嵐のように飛んで来る銃弾をかわしながら、俺は近隣きんりんの村へと進む。

危なっ、今足掠めたよ。

「…チビですばしっこい分、銃撃は当てづらいな」

洗雅のそんな呟きと共に、持っていた銃が泡のように弾けて消える。

「次は『薄青』ウスアオではなく、『櫛色』ハジイロの太刀を叩き込んでやる」

「言葉の意味がよく分からないけど、とりあえず洗雅が死ぬべきだ
って事は分かった」

俺がそう返すと、洗雅は苦い表情を浮かべた。

「…村が見えてきたぞ」

砂漠の中に、うっすらと小さな集落が見えてくる。

「…思ったけどさあ、わざわざ聞きに行かなくても良いと思うんだ
けど」

洗雅の目に疑問の色が浮かぶ。

「『黄の眷属色』けんぞくしよく使って探知すればすぐ見つかるじゃん」

『黄の眷属色』けんぞくしよくの特性は『感知』：敵の攻撃や相手の居場所などを探知できる。それを『朱雀の羽』すざくの搜索に応用しようという事だ。

「何を言つかと思えばそんな事か」

何！？そんな事とはどう言う意味だ！と言いそうになったがやめる。

「無理だ」

「はあ！？何で使えないんだよ！」

「『黄の眷属色』と言えども、感知できるのは生命反応と色箱だけだ。生き物でも色箱でもない羽は無理だな」

「洗雅は俺を見て嗤う。畜生、俺を馬鹿にしやがって。」

「…全然使えないね、暑さには強いくせに」

俺は皮肉を込めて言ってる。反射的に右に避けた俺の左側の空間を、洗雅の大刀が切り裂く。

「避ける事はないだろう？安心して死ね」

地面に刺さった大刀を振り抜き、俺に襲い掛かる洗雅。俺の屈んだ頭上を刃が薙ぐ。

「『櫛色』…『双剣』」

洗雅の手の大刀が2本に分かれ、1対の双剣に変形する。俺は『卯の花』を開箱し、背中に翼を生み出す。

「さて…争ってる場合でもないし、お先に失礼」

俺は翼で飛空して向かっていった村へと逃げる。洗雅の双剣は俺の銀の翼の先を虚しく掠めた。

「…逃げ足だけは速いな」

洗雅は持っていた双剣を色箱に戻し、赤い色箱を取り出す。『赤の眷属色』で最高の力を持つ『純色』だ。

「『赤』…『装備』」

色箱から現れた赤い髪の女が、洗雅を包むように気化する。俺には奴が何をすることが分かった。

「…大方ジェット噴射して飛んでくるだろーな…」

俺がそう呟いた瞬間、洗雅が足から炎を出して飛んでくる。予想大当たりだ。俺は銀の翼をはためかせ、時速120kmで飛ぶ。洗雅より速度が遅いなんて絶対嫌だ。

「…始めからコレを使えばよかったな、銀などに頼る必要が減っていたはずだ」

んだとコラ！？と言おうと思ったがやめた。

村についたが全く人気がない。市街地にも人影は全くなく、風の音だけが響く。

「…誰か見つかったか？」

「いや、まだ俺と銀以外の生体反応はない」

俺達の前を、黄色みがかつた髪ミナエシの女が歩く。『黄けの眷属たぐ色』の『女オ郎花』の色箱だ。

「誰もいないなら情報を聞く当てもないな
俺がため息をつくくと、洗雅の口元が動く。

「…見つけた」

チャットルーム

高麗コリョさんが入室しました

レンさんが入室しました

レン) 【おや？新入りさんですか？】

高麗) 【はい、高麗コリョと言います。インターネットには不慣れですが、宜しく願いますね】

レン) 【いやいや、そんなに畏かしこまっちゃわなくていいよ？ここは憩いこいの場だからねw】

高麗) 【え、いやその…一応礼儀と言つものを心得ておこうと思ひまして…】

レン) 【…まあいいや。そう言えば最近中国の辺りで龍が現れる事件があつてるの知ってる？】

高麗) 【新聞映像で読みました。確かその龍、中国の小さな村をいくつも襲つているそうですね】

レン) 【最近の世界って不吉だよねー、高麗コリョも気をつけなよ？】

高麗) 【…あつたばかりの私を心配してくれるなんて…レンさんは

いい人ですね】

レン（【そんな事ないですよwwこう見えても魂使士たましじかいなんです】

高麗コリョ（【本当ですか！？魂使士たましじかいってほとんど狂ってる人のイメー

ジがあるんですけど…】

レン（【…姉は狂ってますけどねww】

高麗コリョ（【あ、えと…ごめんなさい…】

レン（【まあ狂ってると思われるのは仕方ないよ、魂使士たましじかいになれる

のは『人外の者共』の血を引く者だけだからね】

3色

「…その果物屋の屋台の下に子供がいる」

俺は言われたとおり、屋台の下を見る。するとそこには、まだ7歳くらいの少年がいた。

「洗雅ー、寝てるガキを1人発見ー」

「情報を取る。起こせ」

こんな可愛い顔して寝てる子供を起こすのか?! 罪悪感半端ねーよ。

「…おーい」

小さな声で呼びかけてみる。無反応だ。

「起きなさい! 朝ごはん無くなっちゃうわよー!」

ふざけて母親の真似をする。やはり起きない。

「何をモタモタしている、水でもぶつ掛けてやれば済む話だろうが」

「罪悪感半端無いからヤダ。やるなら洗雅がやれよ」

すると洗雅は、灰色みがかった色箱を開箱する。

「薄青、マシンガン」

洗雅がそう言っていると、現れた薄青色の髪うすあおの青年がマシンガンに変形する。『薄青』は『灰の眷属色』の中うすアオでも、銃タイプに分類される。

つまり銃火器なら、この色箱1つでいくらでも代用が利くと言う事だ。

「え? 目覚ましにそんなゴツいもん使うの?」

「これなら1発で起きるだろう?」

洗雅は地面に向けて、マシンガンをぶっ放した。

うるさい破裂音が響く。

「うああああ!」

すると、少年が跳ね起きる。

「え、ウソ! 起きちゃったよ!」

洗雅の持っていたマシンガンが、泡のように弾けて消える。

「お兄ちゃん達…誰? この村の人じゃないよね…?」

少年の目には恐怖。俺達を異常に警戒していた。

「いや、俺達は怪しい者とかじゃなくて…」

俺はそう言い少年を見る。いつの間にか少年は目の前から消えていた。

「…生体反応が消えた…『オミナエシ 女郎花』でも捉えられない…」

「いきなり消えた…のか？」

泷雅は顎を引いて肯定する。

「あーあ、結局情報収集は失敗に終わりましたよー？」

俺は横目で泷雅を見る。相棒はただ目を閉じていた。

「ハアハア…」

「何やってるんだい！その布は肌身離さず、常時被っておきなさいと言っただろう！？」

少年が逃げ込んだ所は、暗い地下部屋の中だった。そこには老若男女、沢山の人が身を潜めていた。

「誰かにここを知られ、龍に言われたら私達は全滅だ…村の者と以外は絶対に話すんじゃないよ？」

「はい母さん…」

少年は入ってきた出入り口を見る。うつすらと光が差し込んでいる。（もうすぐ日が暮れる…夜になったらまた『奴ら』が来る…）

少年は出入り口の小さい戸を閉め、奥に隠れる。

旅客機から降りてきたノツカと蒼は、大口を開けて立ち尽くしていた。

「ノツカ・シエル様に北龍蒼様ですね」

前にいた背広の男が、2人の前で一礼する。

「主人よりあなた方2人を呼ぶよう仰せ賜っております」
「主人」の言葉を聞いた途端、2人の顔に悲痛な笑みが浮かぶ。
「…嫌な予感がする、アイツのお守りだけは勘弁してほしいな…」
蒼は誰にも聞こえないよう、小さな声でそう呟いた。

洗雅は相変わらず目を閉じたままだ。先ほどから何も進展がないまま、もう日が暮れようとしている。

「洗雅ー、暗くなってきたし、何か食べよーよー」
呼びかけてみる。反応なし。

「…この波長：恐らく竜族の1種『火竜』か」
不意にそう言い、洗雅が立ち上がる。

「距離約1200m、西南西の方角だ」

「チツ、龍じゃなくて竜かよ…朱雀の事は知らないだろうな」

俺は苦い顔をしつつも、茶色みがかった色箱を開箱する。『茶の眷属色』の『銀朱』色の髪をした青年が現れる。

『銀朱』は『茶の眷属色』の中でも槍タイプに分類される。槍術を使える俺にピッタリの色箱だ。

「『銀朱』長棒」

『銀朱』色の髪の青年が細長い棒になる。

「にしても、暗くなってきたな…」

「俺は暗いところでも目がよく見えるんでね」

西南西の方角から爆音。洗雅は背中 of 愛刀『雲雀刀』を振り抜く。

いつもは『櫛色』を使う洗雅だが、相手が竜のときは自分の刀を使う。刀を使い分ける意味が分からないね。

「…来たか」

西南西の方角から灼熱の炎が噴射される。恐らく竜の息吹だろう。

何故か相棒は笑っている。

俺と洗雅は飛翔して回避。業火から逃れる。着地すると同時に、俺

達の前に巨大な影が現れる。

「やけに炎の温度が高いと思っただら…火竜か」

眼前にいる竜は体長約20m、全身を鱗に覆われた赤茶色の竜だった。竜が咆哮する。

「…火竜か、なら好都合」

「戦いに有利も不利もあるか。全て運と実力で決まるんだよ」

俺がそう言うと、洗雅の目が驚いたように見開かれる。

「銀が初めてまともな事を言ったな」

「いつだつて俺はまともさ。洗雅がおかしいんだよ」

言いつつ開箱。『紅碧』の少年が現れる。

洗雅も『黒の着属色』の1つ、『暗黒色』を開箱する。色箱から現

れた少女が霧状になり、洗雅の持つ大刀『雲雀刀』を黒く染める。

「あの火竜の次に、お前も分子レベルにバラしてやる」

「遠慮しとく」

洗雅は大刀の切っ先を火竜へ向ける。俺も『銀朱』の槍を構える。

火竜の口元に光。文字と数字で構成された円式が浮かび上がる。

「なっ…量式術だど…!?!」

俺がそう呟いた瞬間、背後の建物が緑の炎に包まれる。

「あれが『地獄の劫火』と呼ばれる緑焰か」

俺は咄嗟に、安全で確実にこの火竜を倒す方法を探す。洗雅が火竜の前足に向けて小刀を投擲する。小刀は頑丈な鱗で弾かれ、火竜に傷を付けることすら出来なかった。

「弾かれるなら『暗黒色』を纏つていても、内部に深く刺さなければ無意味だな…」

洗雅の顔に苦い表情が生まれる。

「超硬質の鱗…緑焰…火竜…量式術…」

分かってしている情報から推測し、最善策を探す。

「となると、弱点は電気と低温…」

俺は『黄緑の着属色』の1つ『淡萌黄』を開箱する。体から小さく放電している女が現れる。

「…電気量は大丈夫なのか？純色と違って着属色けんぞくしよくは力に制限がある。それにあの鱗うしんを破るとなると、かなりの電力がいるぞ？」

「3ヶ月前の大嵐の時に蓄電ちくでんしておいた。あれから全然使っていないから大丈夫だろう」

俺がそう言つと、洗雅は獰猛じゆうめうな笑みを浮かべた。「淡萌黄ウスモエキ」色の髪の毛が霧状になり、「銀朱ギンシュ」に纏まとわりつく。

「『紅碧ベニヒキ』超低温！」

『紅碧ベニヒキ』の右手が水平に振られ、左手が地面に触れる。すると周囲の温度が急速に下がり始める。

火竜は炎を吐く。当然活動できる範囲の気温も高い。つまり周囲の温度を下げれば行動が鈍る。

「今だ洗雅！とどめを刺せ！」

俺の叫びに反応し、洗雅が大刀ひるがえを翻し飛翔する。

『黒の着属色けんぞくしよく』の特性は『分解』：つまり『暗黒色アンコクシヨク』を纏まとった洗雅の大刀、通称『黒雲雀くろひばり』は刺さればどんな物でも分解する。

「雲流驚斬！」

洗雅の大刀が空を斬る。斬激がまるで羽根のように残酷に舞う。だが火竜は口から炎を吐き、噴射の威力で逃れる。

「まだ火を吹く元気は残ってるようだな」

「…だったら神経回路を焼く」

俺は臍おへひに光る『銀朱ギンシュ』の槍を構える。

「『淡萌黄ウスモエキ』！放電！」

俺の声と共に、『銀朱ギンシュ』の先端から超高压電流が放たれる。雷は火竜の前足に直撃。竜の体制を崩した。

「よし、神経を焼き切る！」

更に凄まじい電気が放たれ、先端に繋がっている竜が感電する。洗雅が飛翔。大刀を竜の顎あごに突き刺す。俺が槍を引き抜くと同時に、竜が洗雅の大刀によって分解されていく。

「…分解されるというより、消えてるっていった方が正しいと思うねコレ」

「ドルトンの原子説を知っているか？原子はそれ以上分解できないし、他の種類に変わることもない。消えたり新しくできたりもしない。つまり消えるのではなく、分解されるの方が正しいといえる」いきなり洗雅が反論してきた。それも長つたらしい解説付きで。俺はそう見えるって言っただけなんだが…

「嘘だろ？あの竜族を倒すなんて…！」

穴に隠れて見ていた村人の1人が、倒れている竜を見て言った。

「…誰だ」

洗雅は竜から大刀を引き抜き、切っ先を1つの空き家に向ける。俺も『淡萌黄』を閉箱し、槍の先を空き家に向ける。空き家からは物音1つしない。

「いるのは分かってる。さっさと出て来い」

洗雅の体からイライラしている証、別名怒気が溢れ出す。しばらく待っていると、空き家の中から数人が出てくる。

「…あつ！あの時の…！」

俺が指差す先には、夕方会ったあの少年もいた。

「…どう言う事だ…？」

「…隠っていてすみません。実はこの村には毎晩、竜が現れるんです」

中年の女性が重々しく口を開く。

「毎晩村人が竜共に食われていました。生き残るために我々は地下に隠れていたんです」

その場にいた全員が唇を噛み締める。なるほど、だから隠れていたわけか。

「…色箱さえ欺く道具があっても…か？」

洗雅のその一言で、村人が全員固まる。

「そんな道具があるなら、竜などすぐに倒せたはずだ」

「…ここにある強力な道具は、金龍の鱗うろこから作った物なんです…」
村人がおずおずと言う。確かに、龍の鱗うろこから作っているなら竜族には効果がない。洗雅と俺が納得して頷くと、最初に会った少年が微笑みながら言う。

「いきなりだけ何かお礼がしたいんだ。何か頼みごとはない？僕らができる範囲の事はするよ」

少年の突然の提案に、村人は目を丸くする。

「村長さんいいでしょ？」

話しかけられた老人はしばらく考えていたが、納得したように頷く。「村を救ってもらったのに、何もお礼をしないというわけにもいくまい」

老人の言葉を合図に、俺と洗雅の周りを村人が囲む。

「や、お礼とかそんな…悪いですよ」

「ささ、こちらへどうぞ」

村人達は俺の言う事など無視し、俺達を先ほどの空き家に連れて行く。

俺の目の前には、どこかの城の食事くらいの量の料理が並んでいた。

「遠慮しないで食べてよ」

横では少年が微笑みながら言う。

「おっと、自己紹介をしてなかったね。僕は加羅からって言うんだ」
そういう問題じゃないんだよ…俺は脳内でそう呟く。

「にしてもあつちの兄ちゃん、よく食べるね…」

いやな予感がして、俺は反射的に洗雅の方を見る。既に空の皿が積み上げられている。その奥には、手を合わせて箸を置く洗雅の姿があった。いつも思うが、早食いにしても早すぎるだろ。

「加羅からだったか？いくつか質問がある」

「知ってる事なら何でも言うよ」

加羅は洗雅に向かって微笑む。
「道具は金龍の鱗から作ったと言ったな。その金龍の能力を詳しく教えてくれ」
加羅は少し考えるそぶりをする。
「僕は見てないから知らないけど、実際に戦った叔父さんが言ってたよ。一番恐いののは、あらゆる系統の術を使える事だつて」
険しい表情になる加羅。それと対称に、洗雅の表情は喜悦に満ちていった。

チャットルーム

千羽鶴（【あれれ、誰もいないなあ…】）
千尋（【私がありますよー】）
千羽鶴（【びっくりした！もう驚かさないでよ千尋さん…】）
千尋（【テヘツ】）
千羽鶴（【…あつ！そつだ千尋さん、最近京都で辻斬りが出るつて噂、知ってます！？】）
千尋（【ああ…着流し姿で、いつも刀を3・4本持ち歩いてる。普段は神社の屋根で笛を吹いてて、その神社に近付いた人を斬ってるつて噂のですか？】）
千羽鶴（【そうそう！運よく逃げ延びた人の話じゃ、正体はまだ20になってない青年らしいよ！しかも涙を流しながら斬りかかって来るんだつて！】）
千尋（【恐いなあ…】）
千羽鶴（【やべっ！そろそろ連れを迎えに行かなきゃ！じゃこれで失礼！】）

千羽鶴さんが退室しました

千尋ちひろ【はぁ…女口調も疲れるな…】

千尋ちひろさんが退室しました

4色

「来たね」

薄暗い部屋で、よく通る男の声がある。

「十二将の第三番『爪牙そつがのノツカ』です」

「十二将の第二番『知性の蒼』」

部屋の奥にある椅子から、1人の男が立ち上がる。

「それで、休暇をもらっている我等に何のようで？」

蒼は厳しい目をする。男は少し驚いたような顔をし、ニツコリと笑う。

「ちよつと君達2人に頼みがあつてね。金龍つて知ってるかい？」

男の顔に子供のような笑みが浮かぶ。

「最近中国に出現するあの金龍の事？」

「実はその金龍の鱗うろこが10枚くらい必要でね、良かったら採つて来てくれないかい？」

蒼の青い目に影。何かを疑うような目だ。

「…宝珠を作るなら目玉のほうが効率がいい上、能力も高まる。何故鱗うろこだ？」

「…蒼君はいつも利益の事ばかり考えてるよね…理由は単に見た目が格好いいからだよ」

男の突拍子とつびよつしのない返答に、蒼は言葉を失った。

「用件も伝えた事だし、そろそろ行つてらっしゃい」

男はそういい、いつの間にか手に持っていたリモコンのボタンを押す。その瞬間、ノツカと蒼の立っていた床が動き、穴が現れる。2人は穴に消えて行つた。

「…紫苑君しおんは、あの2人をどう思うかね？」

男がそう言うと部屋の隅の景色が歪み、半月状の目と口が刻まれた仮面の人影が現れる。

「…我にとつてはただの人形に過ぎぬ」

紫苑しおんと呼ばれた人影は仮面を取る。現れたのは男とも女とも取れる、中性的な容貌だった。

「それでヘスティア、わざわざ我を呼ぶとは何の用だ？」
ヘスティアと呼ばれた男を、右の紅い瞳で見据える紫苑しおん。

「…実は日本にある妖刀『千桜せんおう』を持つて来てほしいんだ」

「…皇族血統の陛下である主が、趣味の指輪作りなどに興きょうじてよいのか？」

紫苑しおんの青い左の眼光が、ヘスティアを射抜く。

「ただ祖先が乱暴な権力者なだけだよ。私は普通の人間だ」

ヘスティアは床に開いた穴を見つめる。紫苑しおんも部屋の景色の中に消えて行った。

「ガホツ！ふう…陛下つて乱暴だなあ…」

「…落とし穴とは、また大層な仕掛けを作ったものだ」

ノツカと蒼がいるのは、路地裏のゴミ捨て場だった。

「しかも落とされる場所がゴミ捨て場とは…」

蒼は興きょうが削けがれたようにため息をつく。

「地味な嫌がらせだね…」

ノツカは服についた埃を叩き落とす。不思議なことに、蒼の服は全く汚れていない。

「はあ…やはりろくでもないことを頼まれたな…金龍か…」

「僕は嬉しいよ？強力な宝珠が手に入るじゃん」

ノツカの周囲を旋回していた宝珠の1つが、青白い光を出して消える。

それと同時に、2人の頭上に巨大な灰色の竜『飛竜スカイトラゴン』が現れる。

「龍は竜族の中でも貴族・皇族にあたる。金龍は上から16番目の貴族階級の超大物だ」

蒼は険しい表情になる。それほど『龍』は恐ろしく強いのだ。ノツ

力は『飛竜』の背に飛び乗る。

「じゃあ金龍狩りは保留しよう。まずは蒼の『朱雀狩り』から…だね」

ノツカがそういうと、蒼の冷たい氷河の瞳は暗みを帯びる。

「…いいだろう」

蒼の瞳が暗みを帯びていくのに対し、口元には喜悦の笑みが浮かぶ。

「久しぶりにコレクションを集めに行くか」

「…僕が知ってる金龍の情報は全部話したよ」

加羅は険しい表情のままいう。

「通常攻撃の全てを無効化するのか…厄介にすぎる」

洸雅が珍しく渋い表情を浮かべる。普段滅多に見せないレア顔だ。

「だが、倒せないこともないだろ。いくらなんでも不死身ってわけではなさそうだし」

加羅はふと立ち上がり、部屋を出る前に言った。

「今度は僕も行くよ」

それだけ言っつて、加羅は部屋から姿を消した。

「通常攻撃の全てを無効化する…恐らく物理攻撃をはじめとする、特殊攻撃の全てを撥ね返されるな」

洸雅は部屋の隅で、金龍対策を練っていた。

「とりあえず、実物を前にして考えよう」

平常を装ってはいるが、俺の内心は荒れまくっていた。

「準備はしっかりするものだが？」

今だけは相棒の無遠慮さに感謝しておく。

「キョウトって初めてですね」

闇に溶け込むような黒の髪を風に靡かせ、1人の少女が歩く。

「月がとても綺麗に見えます」

少女は笑う。まるで、軽く押すだけで壊れてしまいそうな儂い笑みだ。

「えっと、『千桜』でしたよね…今回の獲物」

月の光を受けて、少女の瞳が翠の光を放つ。

「妖刀『千桜』…その刃には『黒の巨人』と『白の巨人』を宿すといわれる封印剣」

少女のソプラノ声とは違う、テノール声が響く。

「『黒の巨人』と『白の巨人』は、巨人族の中でも膨大な術力を持つ。それが刀に封印されてるのさ」

闇の中に、何かを着地する乾いた音が響く。

「説明は終わり。千鶴も事前調査はこのくらいやっておいた方がいい」

声の主は完全に闇に溶け込み、姿は全く見えない。

「『白の巨人』と『黒の巨人』…あの『月の十二使者』でさえ数匹しか所持していないという」

千鶴の表情が険しくなっていく。

「『月の十二使者』…あの『人外の者共』を集めてる変人どもか」
その声と共に、闇の中で何かが動いた。

暗闇の中に、1人の少年が立っていた。辺りは一面紅に染まっている。

倒れている男は銀達に『朱雀の羽』の回収を依頼した男だった。

「まこつちゃんの言ったとおりだ」

少年の手が薬品棚に伸びる。

「まさか『白龍』と『黒龍』の肝臓まであるとは…」

すると床に倒れていた依頼人の男が、少年の細い足を掴む。

「…頼む…それを持って行かれては我ら一族は…ぐあっ！」
少年の細い足が、依頼人の男の背中を踏み躪る。

「血塗れの手で触らないでくれない？汚れるだろ下種が」

少年は氷のような冷たい声で言い放つと、長い服の袖から針のような物を出す。

その針を床に倒れる男に突き刺す。血肉の避ける音がする。

「…あーあ、死んじゃったあ…」

少年は異物でも見るかのような眼差しで、床に倒れた男を見る。そしてどこからか携帯を出し、電話をかける。

『舜？何か用？』

「やあまこっちゃん。こっちはうまくいったよ」

少年は先ほどとはまるで違う、鈴のような声で話す。

『…その『まこっちゃん』ってあだ名やめてくれないかい？』

携帯端末の向こうから呆れた声が響く。

『僕は弥生真。何度いったら覚えるの？』

だが、携帯を握る少年の顔は笑みを浮かべたままだった。

「だってまこっちゃんも、影で美影のことへタレって呼んでるじゃん」
ん

携帯端末の向こう側から、音が消えた。

「あと輝のことも影で馬鹿力って呼んでるよね」

舜と呼ばれた少年が言葉をつむぐ。

「僕優しいから黙っててあげてるのに」

声は意地悪そうにそう言う。

「くそっ、これだからお前と蓮だけは気に食わないんだ」

真はそう言って通話を切った。

「ちよっ！ひどっ！はあ…」

舜はふと薬品棚の横のケースに目をやる。その途端、少年の瞳が驚愕に見開かれていった。

「なっ…！玄武の毒牙だと…！？」

ケースの中にあっただのは、普通より十倍もの大きさを持つ爬虫類の

毒牙だった。

ノツカと蒼は、暗い廃墟はいきょの前にいた。中から腐った臍物さいぶつの臭いが漂う。

「…臭い…本当にこんな所に人間すんでの？」

ノツカは鼻をつまんだまま言う。

「この情報は速くて正確だ。それにここにいるのは人間ではない。蒼は複雑な表情を浮かべ、意味深げな言葉を吐く。

「…人外の者共か…！」

ノツカの袖口から、銀色に輝く宝珠が出てくる。すると、蒼はノツカの肩を軽くたたく。

「心配するな。『人外の者共』の血を引いているだけだ」

蒼はそういつて、廃墟はいきょの中に入っていく。ノツカも複雑な表情を浮かべ、蒼の後に続く。

奥に進んで行く2人。通路には白骨化した人体や、動物の血肉などが散らばっている。

ノツカは苦渋くじゅうの表情を浮かべる。

「…こんな劣悪な環境によく生きてられるね…」

「ああ…だが人気ひじけのない場所にしか情報屋はいない」

しばらく進んでいくと、広い空間に出た。宮殿の大広間くらい広い。「何の用だい？こんな不気味な所に」

暗闇の中から、澄んだ甘い声が響く。

「…これはこれは、ヘスティアお抱えかかの十二将じゃないかい」

闇に響く声の主は、嘲笑ちやうしやうに近い笑みを浮かべている。ノツカの顔に嫌悪感に近い物が浮かぶ。蒼は無表情で一点を見据えていた。

「嫌がらせはほどほどにしろジーク。我らはただ依頼をしに来た」とすると、闇の中から響いていた笑い声が消える。

「…依頼って事は、情報屋の僕に用があるんだね」

ノツカは額に冷や汗を掻いていた。闇の中から足音が響く。

「やあ、久しぶりだね蒼」

「…今回は私情は抜きだ」

闇の中から現れたのは、色白の優美な顔、黒い短髪、真紅の瞳の青年だった。

「一応挨拶はしておくよ。情報屋『影椿』ことジーク。以後お見知りおきを」

青年が敬礼する。

「貴方があの『武者狩り』で有名な『影椿』…!？」

ノツカは驚きを隠せない。

「とても建物を拳で破壊するようには見えない…」

ジークは薄笑いを浮かべたまま、ノツカを見ている。

「君みたいな子にも名前を覚えてもらっているとは…光栄だね」

ジークは小さく微笑む。

「それで依頼だが…『南雲洗雅』の現在地を特定してほしい」

蒼の頬の青い炎が、不気味に燃え上がるように見えた。

「期限は？」

「出来れば今日中だ」

蒼は間を空けずに言う。現在時刻は午後八時だ。

「いいよ。ただお高くつくけど、いい？」

ジークは全く緊張の色を浮かべずに言う。

「分かった」

蒼がそう言うと、ジークはどこからか黒いノートパソコンを出す。

カタカタと、ジークがパソコンのキーボードを打つ音が聞こえる。

「なるほど、依頼を受けて中国に飛んでるね。現在地は大体上海の中央」

ノツカの表情に、悲痛な物が浮かぶ。

「君達さっきまでその上海にいたんでしょ？わざわざこれだけを聞きに日本まで来るなんて、ご苦労な事だね」

ジークは嘲笑にも似た薄笑いを浮かべる。

「…相変わらず皮肉ってくれるな」

蒼は苦笑しながら言う。

「また何かあつたら来る。代金は…」

蒼がそう言うのと、ジークはノツカを指差す。

「代金はその子でいいよ」

「え？」

ノツカの首に、小さな痛みが生まれた。

千尋さんが入室しました

千尋) 【あれっ、まだ誰もいないなあ…】

レンさんが入室しました

千尋) 【あっ、レンさんこんばんは！】

レン) 【こんばんは】

千尋) 【何だか自分だけのようない感じがして心配しました；】

レン) 【…この時間ほとんどみんないませんよね】

千尋) 【みなさんお風呂にでも入ってるんじゃないですか？】

レン) 【今仕事で情報屋に向かっているよb】

千尋) 【情報屋ですか！？格好いいです！】

レン) 【うんうん…特に情報屋で格好いいって言ったら影椿だなあ…】

千尋) 【影椿？】

レン) 【2年前、ベトナムで『人外の者共』が大量発生した事あったよね】

千尋) 【…あの事件ですか】

レン) 【あそこで『武者狩り』と呼ばれた戦士がいたんだ】

千尋) 【知ってます！確か凄い力持ちで、高層ビルも一瞬で壊したあの『武者狩り』ですよ！?】

レン) 【実は…その『影樁』と『武者狩り』が同一人物だって噂が流れてるんだ…】

千尋) 【えええ!?!】

レン) 【本当かは知らないけどね そろそろ情報屋につくんで、おちます】

レンさんが退室しました

千尋) 【…あのフェロ魔、何か有名になってるね…】

千尋さんが退室しました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2258y/>

色彩

2011年12月28日02時49分発行